

ID No.	312
研究課題名	ウイルス感染に伴い形成される遺伝子制御ネットワークの解明とそれに基づく新規診断マーカーと治療標的の同定
研究代表者	稲田 健一 (藤田保健衛生大学・准教授)
研究組織 受入教員 研究分担者	伊庭 英夫 (東京大学医科学研究所・教授) 塩竈 和也 (藤田保健衛生大学・助教) 原口 健 (東京大学医科学研究所・助教)
研究報告書	
これまでに、EV virus の感染が発症と深く関わっているヒト悪性リンパ腫や胃癌症例を対象に、EV virus 内在性の micro-RNA (miR)の発現をホルマリン固定パラフィン包埋病理組織切片上で、高感度 <i>in situ</i> hybridization (ISH)法により検出する方法を開発した。miR-199a の発現に関しても、下記の櫻井の報告との関連性において良好に検出できる系を確立してきた。24 年度はプローブの不具合から発現解析が困難な状況であったが、その後新しいプローブの作製に成功した。そこで、ウイルス肝炎、肝硬変を経て肝癌に至る一連の炎症性発癌過程において、miRNA199a を対象とした発現解析を試みた。C 型肝炎由来肝細胞癌では、HCV ゲノムの発現制御に miRNA199a が関与するとの報告がある。2012 年に当大学病院で切除された同肝細胞癌 11 症例を対象に、10%ホルマリン固定病理組織切片を用いて 199a-5p に関し発現検討し、肝硬変部と癌部を比較した。肝硬変部は 5/11 (45%)、癌部は 6/11 (55%) で陽性となり差は認められず、C 型肝炎由来肝硬変と肝癌における miRNA199a 発現の意義は今回の検討からは不明であった。胃癌 45 例の解析では、食道癌における Brm と miRNA199a の逆相関は見出されなかった。然るに、今回の検討で新たなプローブの有効性は確認された。	